



みとよ市民病院の移転新築オープン

城西大学経営学部教授 伊関友伸

2022年5月9日、筆者が病院の新築移転を支援していた香川県・三豊市立みとよ市民病院(旧永康病院)の外来が開始された。先立つ4月23日に開院式が行われ、28日には旧永康病院が外来診療を終了した。ゴールデンウィークに入った29日から引越作業が行われ、5月1日に入院診療が開始されている。入院診療も外来診療も大きな問題なく始まり、順調なスタートを切ることができた。

旧永康病院(当時199床・一般92、療養48、精神59)は、旧詫間町が1949年に町立病院として開設し、1961年に旧病院の場所に移転された。建物の老朽化が激しく、耐震性に問題を生じていた。最近では医師の退職が相次ぎ、入院・外来患者は大幅に減少し、存続の危機に直面していた。三豊市議会が開催した講演会がご縁となり、新病院の建築と病院の経営再建に協力することとなった。

建物建築の経緯

病院の建て替えについては、現地建て替え

では敷地が狭く、機能が低くコスト高の病院となることを確実なので、ほかの場所に移転新築することを提言した。ローコストでの病院建築を行うため、建築発注に関して支援をするコンストラクションマネジャーを置くこと、基本設計後に建設会社を決定し、建設会社のコスト削減ノウハウを導入するECI方式を導入することを提案した。病床数は199床から122床に縮小するものの、職員を増員し地域包括ケア病床を導入すること(提供する医療の質向上と入院単価のアップにつながる)、病室は全室個室で差額ベッドを取らないことを提案した。古くて汚く、入院したくない病院から、入院して療養したい病院に変わることを目指した。

コンストラクションマネジャーの支援を受けて、2019年5月25日に設計業務委託、同12月22日に建設工事請負業務委託の公開プロポーザ

ルが行われ、委託業者が決定した。2020年10月に起工式が行われ、2022年3月に建物が完成し、引き渡しが行われた。建設期



写真1 病院外観



写真2 個室の状況



写真3 職員休憩室

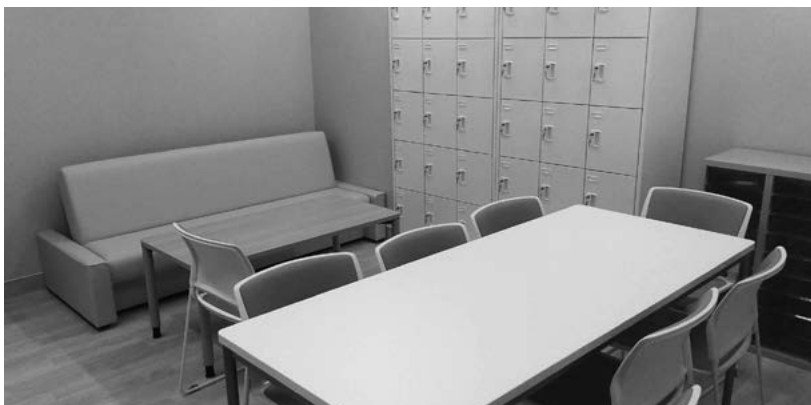


写真4 サービスステーション横職員休憩室

新築移転後の効果

間中、新型コロナウイルスのまん延という事態が発生したが、最終的に当初想定予定金額である建物・外構工事40億円(消費税別)の枠内に収めることができた。

写真1は病院の全景である。主要地方道沿い間琴平線に隣接して建設され、住民の利便性は向上した。構内には市のコミュニティバスが乗り入れている。建物の外観として特徴的

なのが、窓が狭いということである。その要因は個室におけるトイレの配置にある。写真2は、個室の状況である。部屋を有効利用するためにトイレを通路側ではなく、窓側に置いている。そのため、窓の面積が狭くなっている。また、トイレは入院患者の多くがオムツを使う高齢者であることから、職員の提案により3分の1の部屋に設置し、残りは配管を入れただけの状態になっている。写真3は2階にある職員休憩室である。各サービスステーション横にも写真4のように休憩室が設

置されている。職員のアメニティーは向上したと考える。しかし、整備費40億円という制約があったため、職員が働くバックヤードはやや狭いように思われる。ローコストで行う病院建築のため、限界もあると考える。

新築移転後の効果としては、7月に入って3階病棟(一般・地域包括)はほぼ満床、4階病棟(療養)もかなり病床が埋まってきている。5階(こころ)は、旧永康病院時代に長期入院していた患者の退院促進を積極的に行っていたため、病棟に余裕があるものの、次第に入院患者が増えてきている。こころ科は、新病院効果で新規外来患者が急増しており、新たにこころのデイ・ケア、ショート・ケア「たまたま箱」が始まっている。医師不足が相変わらず課題であるが、病院の再生には手応えを感じているところである。

筆者プロフィール

伊関友伸 (いせき ともし)

1987年埼玉県入庁、県民総務課、大利根町企画財政課長、県立病院課、社会福祉課、精神保健総合センターなどを経て、2004年城西大学経営学部准教授、2011年4月同教授。研究分野は行政学。総務省「持続可能な地域医療提供体制を確保するための公立病院経営強化に関する検討会」構成員など、数多くの国・地方自治体の委員を務める。著書に『人口減少・地域消滅時代の自治体病院経営改革』(ぎょうせい2019年)、『新型コロナから再生する自治体病院』(ぎょうせい2021年)など。